

「伊勢物語御歌かるた」研究

—— 共立女子大学博物館本・永青文庫本・同志社大学図書館本を起点として ——

菊きく 地ち 絢あや 子こ

はじめに

『伊勢物語』は、平安初期に成立した全一二五の章段からなる歌物語であり、在原業平に仮託した雅男の生涯を著すものである。古典文学研究者の片桐洋一氏¹も指摘するように、十一世紀初めに成立した『源氏物語』絵合帖や総角帖に伊勢絵が登場することから、平安中期には『伊勢物語』の絵画化は既に成立していたと考えられる。『源氏物語』が源氏絵として多様なメディアに展開したように、『伊勢物語』は後世さまざまな文芸の源泉となった。特に宗達派の絵師たちや尾形光琳など近世琳派の絵師たちにとって、『伊勢物語』は豊かな造形意欲を掻き立てるものであった。そのようななかで、尾形光琳「燕子花図」（根津美術館蔵）のように、杜若の図像のみで第九段東下りを人々に想起させるまでに伊勢絵は洗練されていったのである。連歌や能など芸能の世界においても好まれ、江戸時代の人々にとって『源氏物語』と並ぶ二大古典文学として人気を博した。そして『伊勢物語』から生まれた文芸は、歌かるたにまで及んだのである。

伊勢絵の作品形式は、十三世紀から十六世紀の白描や着色の絵巻にはじまり、十七世紀には特定の和歌を主題にした掛幅や屏風など

の大画面形式が制作される。慶長十三（一六〇八）年には絵入りの木版本である嵯峨本が刊行され、宗達派の色紙をはじめとする小画面形式が加わり、さらに多様性は広がっていく。このような時代の流れのなかで、絵画作品や工芸品に婚礼調度としての需要が高まっていたことも見逃せず、小画面でかつ豪華、教養あふれる調度品として、歌かるたは貝合などと同様に好まれたことが推測される。一方で、十六世紀から十七世紀に制作された『扇の草子』の作例と「伊勢物語御歌かるた」の図様の相関も見逃せない。

本稿では、第一章で本研究の起点となった共立女子大学博物館蔵「伊勢物語御歌かるた」（以下、共立本と呼称）の作品概要を紹介する。第二章では、比較作例として取り上げる永青文庫蔵（以下、永青文庫本と呼称）、同志社大学図書館蔵（以下、同志社本と呼称）の同かるたを中心に、十四例の紹介を行う。そして、諸本を図様系統に基づいて分類し、共立本の位置づけを明らかにする。第三章では、安原眞琴氏の『『扇の草子』の研究』（ベリカン社、二〇〇三年）に導かれ、『扇の草子』と「伊勢物語御歌かるた」の関係性に迫る。歌絵として性質を同じくする両者の比較に加え、当時既に関連があったとされる伊勢物語絵と伊勢歌絵間の図様交渉という視点でも、さらなる検証を行いたい。

本論に入る前に、まずは「伊勢物語御歌かるた」について簡単に説明を行う。「伊勢物語御歌かるた」は、『伊勢物語』全二〇九首の和歌を上句と下句に分け、読み札・取り札の二枚一組にした全四一八枚を揃えるものである。かるたの構成は、左記の四つに大別される^{①②}。

- ① 上の句（読み札）・下の句（取り札）ともに文字のみで記されるもの。
- ② 上の句は絵と文字、下の句は文字のみで記されるもの。
- ③ 上の句・下の句ともに絵と文字で記されるもの。
- ④ 各段を象徴するモチーフの絵札、その場面の和歌の上の句が文字のみで記されるもの。

この他にも、上の句・下の句ともに表面に文字、裏面に揃いの絵で記されるものや、上の句は文字、下の句は文字と絵で記されるものなど、多様な構成が散見される。また、絵札は絹本や紙本の肉筆画のものと、紙本に木版墨摺り手彩色のものがある。本稿で取り扱

う作例は、何れも肉筆かるたで前掲②の型に該当するものとする。読み札には和歌が散らし書きされ、その傍らに関連する絵が添えられている。さらに、各札の大きさもおおよそ同じで、かるたは四つの山に分けられ、内帙で包まれた状態で塗箱に入れられるという形態も共通している。

「伊勢物語御歌かるた」の現存作例は、ほとんどが十八世紀に制作されたものである。藤島綾氏は、伊勢物語研究の観点から「伊勢物語御歌かるた」に着目し、現存最古の絵入り歌かるたは道勝法親王（一五七六—一六二〇）筆と伝わる「百人一首かるた」であり、「伊勢物語」の絵入りかるたが制作されるようになったのは「百人一首」の絵入かるた以降のことであったと指摘する。さらに、「歌かるたの遊び手であった知識階級にとって、古今集や百人一首、伊勢物語の修得は必須だったことから、文字だけのかかるたは比較的早く制作されたかもしれない。」とする。^③

古くから物語の和歌を集成して楽しむ趣向は「白描源氏物語歌合絵巻」などに見られるものであり、「伊勢物語御歌かるた」もその展開のひとつとして誕生したことが推測されよう。

一・共立女子大学博物館蔵「伊勢物語御歌かるた」作品概要

共立女子大学博物館蔵「伊勢物語御歌かるた」は、絹本着色墨書のかかるたである「図1」。本来、二〇九枚あるべき上の句札のうち現存は一八五枚であり、すべての札が揃っていないことは惜しまれる。^④上の句札には、青金、赤金の二種 of 金砂子によって二段の金雲が配され、下の句札には、青金、赤金の帯状の霞が画面の上下に配されている。台紙の裏側は、上の句札、下の句札ともに銀箔押しが施されている。内帙には、紺地に源氏香の図、梅や牡丹などの吉祥の花々が白色で輪郭づけられ、内側は橙色や若草色で刺繍されている。かるたを包むたとう紙には、植物文様が朱で描かれている。内帙で四つの山に分けられたかるたは塗箱に納められ、さらに蓋表に「伊勢物語御歌かるた」と墨書された木製の外箱をもなっている。上の句札、下の句札ともに使用形跡が見られないことは、これらが婚礼調度として制作された可能性も考えられよう。塗箱には、唐草と梅の意匠に加え、福岡藩主黒田家の家紋「黒田藤」の金蒔絵が施されている「図2」。

絵札の和歌は、絵を避けるように札の端から端へと細かく繊細な字体が大きく字間をとって、時には逆勝手で散らされている。また、絵も精緻な筆遣いで、小さい札に収められた景物や器物は可愛らしい。金砂子の上に文字がのっていることから、まず絵を描き、空いたスペースに和歌を書いたと推察できる。

以下、共立本の図様を見ていこう。例えば、第七三首（第三八段 恋といふ）「君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらむ」〔図3〕では、〈文を手にする女性の姿〉が描かれている。この歌は、紀有常のところへ出かけて行ったある男が、有常が留守のため待たされたことを恋心に喩えて詠んだ歌であり、実際には、詠み人も歌を贈られた人物も男性である。画面に描かれた女性は自身が扮する、あるいは相手と想定した女性の姿であり、この歌に詠み込まれた恋心の具象なのである。第一〇三首（第五七段 恋ひわびぬ）「恋ひわびぬ海人の刈る藻にやどるてふ我から身をもくだきつるかな」〔図4〕では、〈藻を刈り取る海人〉が描かれている。この歌は、「海人の刈る藻」にやどる「われから」に、「我から（＝自ら）」を掛けた歌であり、歌の技巧として用いられる語彙である「海人の刈る藻」は物語世界に実在しない。これら二例はかるたの図様を決定するに際して、和歌をイメージソースとするものであり、和歌の情景や歌ことばによって図様が引き出されている。

ところで、共立本には第一六二首（第八十八段 月をもめでじ）と第一六三首（第八十九段 なき名）に、本来あるべき図様とずれが生じている絵札が確認される〔図5〕⁵⁾。共立本の絵師は自ら図様を創出したのではなく、粉本、あるいは先行作例を参照して描いたために、このような明らかな図様の取り違いが生ずるのである。つまり、歌かるたの絵師は、必ずしも『伊勢物語』に通暁しているわけではなかった。とはいえ、絹地に発色の良い顔料で可憐に描かれた優品であることは、誰しも認めるところであろう。

かるたは、歌ことばから引き出されるモチーフ、あるいは伊勢絵の伝統図様や『扇の草子』をはじめとする歌絵を基盤に、花鳥風月、人物、器物などのパターンで混在させている。しかもそれらは、極小の画面のひとつふたつの限られたモチーフで、物語世界を想起させる極めて洗練された伊勢絵となっているのである。

次章では、現存する諸本の系統分類をした上で、共立本の位置づけを検討する。

二、「伊勢物語御歌かるた」諸本系統の分類

「伊勢物語御歌かるた」諸本間には、全図様がほぼ同図という量産型の関係を窺わせるものもあれば、共通祖本を窺わせるもの、図様のイメージソースのみが一致するものなど、さまざまな異同が認められる。何れにしても「伊勢物語御歌かるた」制作には、粉本の存在が窺われている。同一の図様系統に分類できるかるたには、省筆や加筆、左右反転などの積極的な創意工夫を凝らして、他の作品との変化を求めた作例が見受けられる。「伊勢物語御歌かるた」の系統分類については、藤島氏も「図様のグループとして三つほど確認できるが、何れのグループにも属さないかるたも複数あり、今後さらにグループが増える可能性が高い。また、各グループのなかでもさらに細分化が可能であり、図様の分類はやや複雑である。」と指摘する通り、その詳細については未だ論じられていない。

さらに遡ると、定型となる図様の形成には、『伊勢物語』の〈読み〉の問題が潜んでおり、そこには制作者の『伊勢物語』解釈があらわれていると言える。第七首（第六段 芥川）「白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを」の図様に注目してみよう。この歌は、男が女を家から連れ出し逃げる最中に、草の露を見た女が「あれは真珠ですか、何ですか」と尋ねたが、男が急ぐあまりに答ええないまま女は連れ戻されてしまった、男は「あれは露だよ」と答えて露が消え入るように二人で死んでしまえばよかったの、と嘆き悲しむという歌である。図版に掲げるとおり、同一の和歌を主題としながらも、その図様には各々に特徴があらわれる。永青文庫本の〈露と女〉〔図6〕は、歌の情景をイメージソースに持っていること、そして物語をよく知る人物によって図様が創出されたことを物語っている。同志社本の〈女を背負う男〉〔図7〕は、宗達派の色紙がまず連想されるがごくよく知られた図様であり、先行する伊勢物語絵がイメージソースとなっている。また、旧鉄心斎a本の〈和歌を詠む男〉〔図8〕は、物語の主人公をあらわすのであろう。つまり、この和歌の章段全体に通曉した者たちにとって〈和歌を詠む男〉は業平その人であり、彼の嘆きに寄り添う図像と言える。さらに『百人一首』や『歌仙絵』にも通ずるという遊び心も、そこには看取できる。

以下では、管見の限りで「伊勢物語御歌かるた」の諸本系統の分類を試み、どのような『伊勢物語』解釈によって図様形成が行なわれるのか分析を行なう。

(一) 諸本紹介

まずは本稿に取り上げる肉筆かるたのうち、前章にて概要を示した共立本を除く諸本の紹介を、主な比較対象とした永青文庫本、同志社本を中心に行う。尚、法量の単位はセンチメートルである。

・伊勢物語御歌かるた 江戸時代 絹本着色墨書／一組 各札七・八×五・四 東京・永青文庫^⑦

絹本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。上の句札には、青金、赤金の金砂子で画面上部に金雲が配されている。いずれの札の金雲も下部の形が同工で、型置きをして金砂子を蒔いていることが判る。この型は、下の句札の画面上部にも使用され、加えて画面下部の楕円型の雲もすべての札で形状が一致する。上の句札、下の句札ともに、台紙の裏側は金箔押しである。内帙は、植物文様が施された鶯色地の金欄で、内側の台紙は、朱で牡丹文様が彩られている。かるたは四つに分けられ、「伊勢物語御歌かるた」と蒔絵された塗箱、さらに「伊勢物語御歌かるた」と墨書された木箱に納められている。内箱と外箱の箱書きの字体は同筆であり、かるたの字体とも極めて近いことから、箱も含めて制作当時のものとする。

永青文庫本の図様を見ると、共立本と一致するものが多く共通祖本の系譜にあることは明らかである。一方で、モチーフの数や表現の詳細には相違が見られ、共立本、永青文庫本の各々の絵師が、粉本に対して独自のアレンジを加えていたことが判る。第一八七首（第一〇八段 浪こそ岩）「よひごとにかはづのあまたなく田には水こそまれ雨は降らねど」の札では、共立本と同じ図様を描いている。しかし、共立本が歌の語彙から蛙を二匹描くのに対して、永青文庫本では蛙の姿がはつきりと描かれない。細密な描写が特徴的である永青文庫本に蛙がはつきりと描かれないことから、永青文庫本の絵師が参照した先行作例から図様をうまく読み取れなかったことが想像されて大変興味深い。装束の衣文線や水文、月などに銀泥が用いられた細密で繊細な表現かつ、迷いのない力強い筆致と巧みな構図は永青文庫本の特徴であり、モチーフに絶妙に寄り添う美しい字体も響き合い、八センチ程度の手のなかの優美な遊びものとして、魅力的な作例と言えるだろう。

永青文庫は、細川家に伝来する歴史資料や美術品等の文化財保存、管理、研究を目的とした美術館であり、昭和二十五（一九五〇）

年に侯爵十六代護立公によって設立された。この細川家と歌かるたには深い関わりがある。⁸⁾ひとつは、細川幽斎(一五三四—一六一〇)の養女を母にもつ中院通村(一五八八—一六五三)にまつわる言説である。

抑本朝にて其始、源氏絵会員合せ初り、其後中院道村公、小倉色紙歌合せ加留多、中立売麩屋何某に命じて作らせ、次第追て今専業を所為、其職の渡世とす。

桑林軒『欲遊桑話』宝暦頃(山口吉郎兵衛『うんすんかるた』⁹⁾収載)

十四日、召経師藤藏〔カルタ、石川主殿頭所令新刊也、南蛮ノアソビ物也〕令摺之

中院通村『塵芥略記』元和二年二月の条(宮武外骨『賭博史』¹⁰⁾収載)

二つの記述から、中院通村が小倉色紙歌かるたを麩屋何某に命じて作らせたということ、そのかるたが元和二年の二月十四日に確かに存在していたことが明らかであり、山口氏は、これらを歌かるたの創始に関わる一説とする。また、幽斎の長男・三斎の側室であった秀岳院(一五七七?—一六三五)に、古今集のかるたを考案し烏丸光賢に入興し京で暮らす娘・お万へ贈ったという記事が『当家雜記』(九州大学附属図書館細川文庫)に残されていることを、中村幸彦氏は指摘している。¹¹⁾これらのように、通村、秀岳院、お万という幽斎に関係する人物たちが歌かるたの制作や京での流布に関わったという記事内容は興味深く、また、細川三斎筆「百人一首扇面歌留多」の永青文庫所蔵も併せて、近世初期の細川家と歌かるたとの結びつきが伺える。¹²⁾このような歴史の上に基づいて、「伊勢物語御歌かるた」は重要な所蔵品のひとつとして細川家に伝来したのである。

・伊勢物語御歌かるた 江戸時代後期 絹本着色墨書／一組 各札七・九×五・五 大阪・同志社大学図書館¹³⁾

絹本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。上の句札、下の句札同様に、青金、赤金の金砂子が画面全体に散らされており、金雲は配されないことが特筆される。上の句札、下の句札ともに台紙の裏側は銀箔押しで、上の句札には、下の句が大きく墨書されている。かるたは、「伊勢物語御哥かるた」の墨書がある塗箱に納められている。

同志社本は、人物を排して留守文様化した図様を多く持っている。このように、伊勢絵の伝統図様を拝借しながら一部分を抜き出して描く傾向が見受けられる。第七八首（第四十一段 紫）「紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」〔図9〕では、伊勢絵として流布する〈袍を洗い張りする女〉の情景を描いている。身分の高い男が妻の妹を気の毒に思い、緑色の袍を贈った。それは妻の姉妹というゆかり（紫）からである。しかし、女の洗い張りをする姿を描く共立本、永青文庫本に対し、人物を排して器物のみを描くという同志社本の特徴があらわれた札である。

・伊勢物語かるた 伝千種有能（書） 江戸時代（十七世紀後半） 紙本着色墨書／一組 各札 八・三×五・八 個人蔵（個人蔵甲本）¹⁴

紙本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。以下、個人蔵甲本と呼称する。その他のかるたによく裝飾される金砂子や金雲は見られないが、字札には金泥で画面上下部にそれぞれ雲形が引かれ、中央部には芦手や秋草などの植物文様が施されている。両札ともに台紙の裏側は金箔押しで、内側に金箔を押した花文散らし紗綾型文の緑色たとう紙に包まれ、鉄線文に「伊勢物語」の文字の入った蒔絵筆筒に納められている。なお、ひとつのたとう紙の内側に「従三位源有能書」とあり、和歌の筆者は千種有能（一六一五—一六八七）であると伝承される。絵札の構図は吹抜屋台を描くものが多く、屋外や簀子、門前での場面が多いかるた図様において物語絵的な要素を残している。図様は伊勢絵の伝統図様に共通するものが多く、さらに同場面のなかで特定のモチーフに焦点を当てて描くのが特徴である。

・伊勢物語かるた 伝葛岡宣慶（書） 江戸時代（十七世紀後半） 紙本着色墨書／一組 各札 九・〇×六・〇 京都・細見美術館¹⁵

紙本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。以下、細見本と呼称する。金雲は、絵札は画面上部のみ、字札は画面上下部に金砂子と切箔が型置きされた上に蒔かれており、全体に金泥引きの霞が施されている。加えて字札の画面中央には金泥で草花が描かれており、豪華で優美な様相を呈している。両札ともに台紙の裏側は金箔押しで、七宝文の縹色地金欄のたとうに包まれ、蓋表に「伊勢物語」の文字が蒔絵された黒漆の塗箱に納められている。朱塗の漆箱には極書¹⁶が一通納められ、歌人・葛岡宣慶（一六二九—一七一七）の筆と伝承される。絵札は極彩色で庭木や草花、装束の文様に至るまで細部を丹念に描くもの

であり、その他のかるたと比較すると大きさが一回り大きいことも特筆すべきであろう。伊勢絵をかるたという小画面形式に封じ込めたような構図が特徴的で、その細密さによる優美な佇まいはひとときわ光彩を放つものであり、歌ことばに基づいて形成される図様においても、同様にこれらの趣向を見ることができるといえる。

・伊勢物語かるた 江戸時代（十八世紀） 絹本着色・紙本墨書／一組 各札八・〇×五・五 大阪・和泉市久保惣記念美術館¹⁷

絹本着色・紙本墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二一〇枚の計四一九枚を揃えるかるたであり、第二〇九首に重複する札が見られる。以下、久保惣本と呼称する。絵札、字札には青金、赤金の金砂子が蒔かれており、その形式は絵札を絹本、字札を紙本と分けられている。台紙裏側は金箔押しで、植物文の縹色布張りたとうに包まれ、黒漆塗箱に納められる。本稿で取りあげる肉筆かるたのうち、久保惣本以外のすべてにおいて上の句札が絵札、下の句が字札であるのに対し、久保惣本は上の句を文字のみ、下の句を絵と文字と唯一の形態をしている。字札である上の句札の歌の前に、題字の如きことばが添えられることも特筆すべきである。久保惣本は、同志社本と同系統であることが推測され、伊勢絵の定型場面を想起させるモチーフや人物に焦点を当てて描かれるのが特徴である。

・伊勢物語かるた 江戸時代 紙本着色墨書／一組 各札七・六×五・〇 東京・国文学研究資料館（旧鉄心斎a本）¹⁸

紙本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。以下、旧鉄心斎a本と呼称する。絵札の画面上部と字札の画面上下部には金砂子が散らされ、台紙の裏側は銀箔押しである。江戸千代紙のたとうに包まれ、塗箱に納められている。旧鉄心斎a本は図様の定まりを感じさせるすっきりとした構図が特徴である。

・伊勢物語歌留多 江戸時代（十八世紀） 紙本着色墨書／一組 各札七・九×五・六 東京・国文学研究資料館（旧鉄心斎b本）¹⁹

紙本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。以下、旧鉄心斎b本と呼称する。絵札の画面上部、字札の画面上下部には、型置きによる金雲が施される。両札ともに台紙の裏側は金箔押しで、紗綾型文の厚手のたとう紙に包まれ、黒漆塗箱に納められる。旧鉄心斎b本は、単一人物や器物を抜き出して描く際にも必ず背景をとにする傾向にあり、物語絵

の様相が残っていると言えよう。

・伊勢ものかたりカルタ 江戸時代 紙本着色墨書／一組 各札八・四×五・七 東京・国文学研究資料館（旧鉄心斎c本）⁽²⁰⁾

紙本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。以下、旧鉄心斎c本と呼称する。絵札には画面上部に金泥による霞が一／二本ほど引かれる。字札には全体に金砂子が蒔かれ、画面中央部には植物文様が施される。かるたは緑砂子散らしに朱と紫のしのお草模様を刷られたたとう紙に包まれている。絵札の図様は『伊勢物語』をイメージソースとするもので、留守文様の趣向はなく物語絵的である。

・伊勢物語御歌かるた 江戸時代 紙本金地着色墨書／不揃 各札八・三×五・八 東京・国文学研究資料館（旧鉄心斎d本）⁽²¹⁾

紙本金地着色墨書、上の句札、下の句札、各二〇九枚のうち幾枚かを欠く不揃のかるたである。以下、旧鉄心斎d本と呼称する。絵札、字札ともに金箔が押された上から絵や文字が書かれており、絵札には落款を模してか朱が入られている。両札ともに表裏金箔押しで、極彩色によって彩られる。管見の限りであるが、旧鉄心斎d本も物語絵的な図様である。

・伊勢物語歌かるた 江戸時代中後期 絹本着色墨書／一組 各札七・九×五・五 兵庫・芦屋市立美術館⁽²²⁾

絹本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。以下、芦屋市美本と呼称する。絵札、字札ともに、画面上部には型置きによる金雲、下部には金泥引きの霞が施され、さらに金砂子も絵札の上部、字札の上下部に蒔かれている。芦屋市美本には歌意に基づく情景を描くものが散見され、絵と歌（歌意）を通じて『伊勢物語』を享受するためのものであると考えられる。

・伊勢物語歌留多 江戸時代 紙本着色墨書／一組 各札七・一×五・二 愛媛大学図書館鈴鹿文庫⁽²³⁾

紙本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。以下、鈴鹿文庫本と呼称する。絵札の画

面上部と字札の画面上下部に金砂子が蒔かれる。貝と植物文様のたとう紙に包まれ、木箱に納められている。鈴鹿文庫本の絵札はより簡略化されており、形式、図様を含むかるたのほとんど要素において旧鉄心斎a本と酷似している。

・伊勢物語かるた 江戸時代（十九世紀）紙本着色墨書／不揃 法量不明 東京国立博物館²⁴

紙本着色墨書、上の句札一九六枚、下の句札一九六枚の計三九二枚が現存するかるたである。以下、東博本と呼称する。絵札、字札ともに画面上下部に金砂子を配しており、制作工程としては絵、金砂子、歌の順であったと推察される。両札ともに台紙の裏側は金箔押しで、中央下部には歌の番号が墨で加筆されるものもある。内帙は植物文様が施された鶯色地の金欄で、塗箱には車輪に梅の家紋が蒔絵されている。図様に着目すると、代表的な章段においては他のかるたと同様に伊勢絵からモチーフを抜き出しているが、一方で比較作例のどのかるたにも見られない図様もたびたび描かれている。かるた図様において画面に三人以上の人物が描かれることは珍しいが、第一二六首（第六九段 斎宮）「君やこし我や行きけむおもほえず夢か現かねてかさめてか」では、斎宮と男、そして物語に登場する「小さき童」の三人が描かれている。これは先行する伊勢絵に基づく図様であり、複数人物が描かれることの多い東博本からは、人物を含めた物語の情景を積極的に描く姿勢が看取される。

・伊勢物語歌かるた 江戸時代（十九世紀）紙本着色墨書／一組 法量不明 個人蔵（個人蔵乙本）²⁵

紙本着色墨書、上の句札二〇九枚、下の句札二〇九枚の計四一八枚を揃えるかるたである。以下、個人蔵乙本と呼称する。青金、赤金の金砂子によって金雲があらわされる。絵札には二段の金雲、字札には帯状の霞が画面の上下に配される。金雲の形式に加えて、和歌の筆者や面貌表現に至るまで酷似しており、同工房の作品であると推察される〔図10〕。個人蔵乙本と共立本は、同じ歌の札において同じ図様を用いる一方で、モチーフの詳細は異にしている。個人蔵乙本に至っては実見にかなっておらず、情報が求められる。

（二） 諸本系統の分類

本節では、図様系統に基づいて同一祖本にあるとみられる諸本の分類を行なう。

A系統（細見本）

まずここにA系統として定めるのは、「伊勢物語御歌かるた」の作例のなかでも比較的早い時期に成立したと考えられる細見本である「図11」。特に細見本は、かるたという小画面に複数の人物が配される伊勢絵をそのまま封じ込めたような構図が特徴で、物語絵的性格を強く持っている。多様な植物の描き分けや調度品の再現に見受けられる精緻な筆運びからは、場面の細部まで描こうとする意欲を感じる。細見本と個人蔵甲本は系統を分けたものの絵札に描かれる場面には重なりがあり、ほとんどの札において左右反転で描かれる点も非常に興味深い。伝承筆者の生没年から推定すると、細見本の制作期は十七世紀後半から十八世紀初頭と考えられる。

A'系統（個人蔵甲本、旧鉄心斎b本、旧鉄心斎c本、旧鉄心斎d本）

A'系統の作品については、未だ全様にまで調査が至っておらず、現時点での仮説としておく。現状では伊勢絵に近く位置する物語絵的な図様が特徴のかるた初期作品であるA系統と、かるた独自の図様が定型化するB系統、あるいはD系統に枝分かれする間の過渡期に位置するとおきたい。A'系統には、個人蔵甲本、旧鉄心斎b本、旧鉄心斎c本、旧鉄心斎d本が分類される。とりわけ、個人蔵甲本は伝承筆者から十七世紀後半の制作が検討されるが、A'系統の作品は細見本と比較すると画面の精緻さに欠けるものであり、系統としては区別される。絵札には後述のB系統のような簡略化やD系統のような留守文様で描く図様が見られ、かるた独自の図様定型に近づいてきた様子を看取できる。しかし、A'系統の絵札は確実に背景をとまなうという点で、B、D系統とも区別しておきたい。

そして注目したいのは、旧鉄心斎b本、旧鉄心斎c本、旧鉄心斎d本は、他系統の諸本が景物のみで構成している場面において、人物を加えて描くことである。これらは、図様形成におけるイメージソースが物語、あるいは伊勢絵の伝統図様にあることを意味している。旧鉄心斎b本の第十首（第九段 東下り）「から衣きつつなれにしつましあればはるきぬる旅をしぞ思ふ」の絵札は、ほとんどの歌かるたでかきつばたと八つ橋のモチーフのみを描くのに対し、かきつばたの横に座す男二人を描いている「図12」。さらに、旧鉄心斎c本の第一五七首（第八七段 布ひきの滝）「蘆の屋のなだの塩焼いとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり」においても、塩焼の情景に加えて塩竈の前に女の姿が描かれ「図13」、第一五八首（第八七段 布ひきの滝）「わが世をばけふかあすかと待つかひの涙の滝といづれ高けむ」においても、山と滝に松の情景に加えて、旧鉄心斎c本には歌の詠み手と想定される業平の兄の姿が「図

14」、旧鉄心斎d本には業平と兄の二人の姿が描かれる「図15」。これらの場面は、桃山期に成立した「小野家本伊勢物語絵巻」(以下、小野家本と呼称)をはじめとする絵巻の図様に影響を受けるものであり「図16」、小野家本と同系統の絵を持つ絵巻は多数存在している。小野家本は、物語内容そのものを絵画化するだけではなく和歌の表現世界を絵画化した絵が数多くみられるという特徴があり、和歌を通じて物語を楽しむ『伊勢物語』享受という部分においても、かるた独自の図様形成に大きく影響を受けたと考えられる。

B系統(共立本、永青文庫本、芦屋市美本、個人蔵乙本)

B系統に位置づけるのは、かるた独自の図様へ展開し定型化する、共立本、永青文庫本、芦屋市美本、個人蔵乙本である。B系統の特徴はA系統、A'系統と比較して、歌意や歌ことばをイメージソースとする絵札が数を増やすという点にある。絵札に描かれる場面と歌に基づいて、『伊勢物語』の章段を想起し享受するものである。また、B系統に属する三つのいずれもが絹本着色の豪華本であり、かるたという遊びものの道具としてではなく、一枚一枚鑑賞しながら物語を楽しむ絵巻や画帖に近い存在であった可能性も見いだすことができる。

先に指摘した小野家本に加えて、『扇の草子』もかるたの図様形成を語る上では重要な先行作例である。『扇の草子』とは、和歌と和歌の内容を絵画化した扇面画を集成したもので、和歌の出典は勅撰和歌集や謡曲、御伽草子、狂言、当時の流行歌まで多岐に亘り、そのなかには『伊勢物語』も含まれる。現存作例は、五十件以上にのぼり、十六世紀から十七世紀の限られた期間に制作されている。²⁷⁾なかでも、根津美術館蔵「扇面歌意画巻」(以下、扇の草子根津本と呼称)には、『伊勢物語』の和歌が勅撰集に次いで多い二十九首収載されており、また制作期が十七世紀前半と推定されることから「伊勢物語御歌かるた」に先行し影響を与えたものとして注目される。先行研究によると扇の草子根津本の図様には、「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」(以下、梵字白描絵巻と呼称)や和泉市久保惣記念美術館蔵「伊勢物語絵巻」(以下、久保惣絵巻と呼称)、「異本伊勢物語絵巻」(以下、異本絵巻と呼称)、小野家本、嵯峨本のほか、室町後期の成立とされる中尾家本、甲子園学院美術資料館本など、多くの伊勢物語絵に該当する場面が描かれており、先行する作例に基づいて図様形成が行われたことが明らかとなっている。「伊勢物語御歌かるた」も、和歌を集成して『伊勢物語』を楽しむという趣向において『扇の草子』と通ずるところがあり、『扇の草子』に描かれる図様、あるいは図様形成における方法という点で積極的な影響を受け

たと考えられる。

C 系統（旧鉄心斎 a 本、鈴鹿文庫本）

C 系統は B 系統に準ずる図様を持ちながら、さらに簡略化、定型化が進んでおり、構図が整っていることが特徴である。これは「伊勢物語御歌かるた」が量産期を迎えたことを示しているだろう。C 系統には旧鉄心斎 a 本、鈴鹿文庫本が分類され、詳細な画面構成も含めて酷似しており、ここにも C 系統が量産型のかるたである様相が看取できる。

加えて鈴鹿文庫本には、重複する二札を第二〇四首に確認している。二枚の図様が合致していることは、鈴鹿文庫本が量産されているたるたの一組である可能性を高く示しており、一方で、装束の一部の彩色が異なること、和歌の改行位置が一致しないことから、制作過程において決まりごとはなく、言わば流れ作業的に行なわれていたことが予測される。

D 系統（同志社本、久保惣本）

A 系統を伊勢物語歌かるたの図様変遷の起点と仮定し、前述までの B・C 系統の流れを一方とすると、D 系統はそのもう一方に位置づけることができる。B・C 系統が歌に関心を向けるのに対し、D 系統は『伊勢物語』の物語に関心を向けている。同志社本、久保惣本は、これに属するものである。図様の一致に加え、画面全体に蒔かれる青金、赤金の金砂子という作品形式にも共通性をみることができる。また、久保惣本の第二〇九首の絵札は重複しており、男が脇息に寄りかかった二枚の図様は合致するが、装束の彩色の一部が異なっている。久保惣本もまた量産型のかるたであった可能性が指摘される²⁸⁾。

久保惣本については、「モティーフの事柄だけが描かれたものが比較的多い」こと、「男か女が一人だけで描かれていて、何故この歌の絵として描かれたのか判然としない絵が存在する」ことが指摘される²⁹⁾が、これは、D 系統が『伊勢物語』を「歌」ではなく「物語」というフレームで捉えていることのあらわれであり、前者は先行する伊勢絵の伝統図様から器物のみを抜き出して描く留守文様に対する指摘であり、後者は『百人一首』や「歌仙絵」のように詠み手の姿を描くことを指し情緒的に物語に導く効果があるかもしれない。一方で、伊勢絵においてあまり描かれることのない場面やあまり知られていない歌が主題の場合、単に歌に用いられる語彙からモ

ティーフを形成するということも相応に行われている。そのようななかでD系統は、図様の多様性のひとつとして『百人一首』や「歌仙絵」のような詠み手の姿を描いた可能性も考えられるだろう。何れにしてもD系統の特徴が色濃く出ているあらわれる図様と言えよう。

E系統（東博本）

東博本には、「伊勢物語御歌かるた」によく描かれる図様も見受けられる一方で、まったく独自の図様も多く見られる。他五系統との異同が多い作品として、別のE系統に分類しておきたい。また、東博本が固有の作品なのか、同じ特性を持った系統のうちのひとつなのかは、他本の存在が確認されていない今、判断することはできない。しかし、他系統の図様と一致する札には、先行する伊勢絵をイメージソースとする図様や量産型のかるたによく描かれる図様も見受けられる。

(三) 諸本系統の図様変遷

本節では分類した六つの系統を図様変遷の視点から論ずる。まずは、鎌倉期以降の伊勢絵の伝統図様に基づいた図様形成が行われたことが指摘される、もともと成立期が早いと推定するA系統に着目する。A系統は、かるた独自の図様として定型化したB系統と、もう一方に連なるD系統の両要素を持ち合わせることから、「伊勢物語御歌かるた」の初期作品としてかるた図様の起点となり、いくつかの系統へと枝分かれしたことが推察される。

A'系統については、A系統からかるた独自の図様展開を見せる過渡期的要素を持つものと仮定して位置づけたい。先に指摘したように、A'系統に分類される諸本のなかには、先行する伊勢絵作品からの影響を色濃く受け継ぐものが散見される。ここから簡略化を見せた先にB系統、D系統のそれぞれがあるが、A'系統がこれらと区別される理由には植物や器物などのモチーフを個別に描くことがないという点が挙げられる。A'系統においては、人物の有無に関わらずモチーフはすべて情景の一部として描かれるのが特徴的である。

B系統には、物語絵的なかるた図様であるA系統を簡略化したものだけでなく、歌を通じて物語を享受するための図様として歌意にも注目が集まる。平たく言えばB系統はA系統の簡略化のかたちであるが、この段階での簡略化が量産化のためのものでないことは共

立本や永青文庫本の形式から見て明らかであり、B系統は伊勢絵におけるかたる独自に起こった図様展開の一部と言えよう。

続く量産型の形跡が残るC系統は、B系統と多くの図様を一致させている。つまりC系統は、量産を見据えて図様がさらに簡略化されたものであることが推測される。鈴鹿文庫本の重複する札を見ても、C系統が量産型のかたるたであると見て間違いないだろう。

A系統を起点に派生するもう一方の系譜と仮定した、D系統に着目する。D系統は、伊勢絵の伝統図様から物語を想起させるための器物を抜き出して単体で描く、という図様形成が特徴である。A系統を起点として展開するB・C系統とは別の系譜を辿るものであり、絵札からは明らかな違いを見て取ることができる。一方で、図様形成のイメージソースは一致する場合も多く、人物や器物を情景のなかに含めず単体で描く「歌仙絵」や「歌絵」、「器物画」の趣向によって、その違いが生み出されていると言える。その点で言えばD系統は、図様形成のイメージソースには先行する伊勢絵図様を参照するものの、実際の画面を構成する時点では伊勢絵に留まらない先行作例を広く参照している可能性が推察される。かたる図様としてある程度の定型化を向かえたB系統において、D系統は伊勢絵以外の絵画からの要素も取り入れることにより、定型化によって退屈しがちであった絵札に多様性を加えることを目指したとも推察されるのである。

最後に、E系統を他五系統のなかに位置付けることは、東博本以外の作品を確認できない現状では困難である。しかし、東博本の絵札の構図は、伊勢物語絵をイメージソースとする図様や量産型のかたるたによく描かれる図様に加え、独自の図様の何れにおいても整っている。画面の上下部に金砂子を蒔く形式も珍しいものではなく、筆者はE系統に分類される作品が他にも現存すると考えている。

以上の諸本系統の分類のごとく、共立本はB系統に属する。B系統の特徴には、図様形成の軸が物語だけでなく、歌にもあることが挙げられる。B系統は発色のよい顔料で可憐に描かれた絹本の作例であり、実際に遊ぶために用いられたのではなく、絵や和歌を通じて『伊勢物語』を享受するためのものとして、絵巻や画帖のように鑑賞した可能性を指摘したい。金の雲霞を青金、赤金と使い分け、金に輝きと色、双方の効果を託す繊細さは、B系統の特性である。このように、豪華本の形式で一枚一枚丁寧に制作された様子が窺えるB系統のかたる諸本は、互いに図様が共通祖本の系譜にあると認められ、特に個人蔵乙本は共立本と同工房での制作と考えられる。

三、『扇の草子』研究にみる歌絵と『伊勢物語御歌かるた』

伊勢物語の絵画化については、伊藤敏子氏³⁰、千野香織氏³¹をはじめ多くの研究がなされている。『伊勢物語』が平安初期に成立した当初から絵と共存してきたことは冒頭のとおりであるが、惜しむらくは平安期に制作された作品が現存しないことである。伊勢絵の現存最古の作品には、十三世紀初めに制作された「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」(断簡二十二葉³²)であり、着色の伊勢絵としては十四世紀初めの制作と考えられる和泉市久保惣記念美術館の「伊勢物語絵巻」(一巻うち詞書二段、絵七段と詞書一葉)が知られるところである。これらは物語の一部が現存するのみで、制作当初の全貌を伝えてはいない。その後も室町期の残された作例はわずかに、江戸時代に入って刊行される嵯峨本(一六〇八年)を契機に、冊子や絵巻、色紙など数多くの作品が伝来し、作品形式の多様化を迎えたことを知る。また、千野氏は『伊勢物語』や伊勢物語絵は、現在一般に想像されるような、女性たちに与えられた消閑の道具ではなく、男性たちの重要な政治文化だった」と指摘しており、男性貴族は政治的な意味を持つ絵画鑑賞の場での「名所絵」³³などの画題比定のために、『伊勢物語』をはじめとする文化教養(古典知)が必要とされたとしている。つまり、『伊勢物語』から独立した伊勢絵の需要は、特定のモチーフから物語や和歌を読み解くことを楽しむ男性貴族の受容によっても、さらなる盛り上がりを見せたと言える。

『伊勢物語』が歌物語であるだけに、その享受においても和歌を中心としたものは見逃せないが、『扇の草子』を分析した安原氏は「『歌かるた』と『扇絵』が近似するのは、同じような小画面に、歌絵という同ジャンルで、同画題の絵が描かれていたためと考えられるかもしれない。」と指摘し、またこの二つが「これほど酷似するのは、粉本というべき定型があったからにはかならない。」と粉本の存在へも言及する³⁴。本章では、安原氏の指摘を承けて「伊勢物語御歌かるた」と『扇の草子』の関係性を考えていく。

(一) 図様形成におけるイメージソース

ここで改めて「図様形成におけるイメージソース」、つまり各章段、あるいは歌にともなう図様の形成が何に基づいて行われたかという点について整理したい。『伊勢物語』に基づく絵画は広く「伊勢絵」と呼称されるが、物語にともなう絵画と和歌にともなう絵

画の二つが存在する。物語にともなう伊勢絵は、『伊勢物語』を説明する「伊勢物語絵」であり、物語本文に基づいて図様が形成されている。一方で、和歌にともなう伊勢絵は、章段よりさらに多い和歌のひとつに添えられるものであり、その図様形成のイメージソースは複数にある。本節では、本稿の最後にまとめた対照表と合わせて、「伊勢物語御歌かるた」の図様形成におけるイメージソースを整理していく。

まずは、先行する伊勢絵である。絵を見ただけで誰もがどの章段か想起できる代表的な伊勢絵図様は、かるたにおいても和歌より優先してイメージソースとなる。かるたという小画面のなかに伊勢絵を再現するものもあれば、ある一部の情景を抜き出して描くものもある〔凡例○〕。また、留守文様として場面を想起させるモチーフが描かれるものもある〔凡例●〕。

次に、物語が挙げられる。先行する伊勢絵図様の多くは物語にイメージソースを持っているが、一方で、一二五段ある『伊勢物語』の章段においては絵が添えられないことも多い。ここで分類するのは、先行する伊勢絵作例がない章段、あるいは先行作例とは別の場面を描く章段にて物語をイメージソースに図様が決定された場合である〔凡例□〕。この場合にも留守文様で描かれるものがある〔凡例■〕。

そして、歌意や歌ことばをイメージソースとするのが、伊勢歌絵ならではの図様である。歌意をイメージソースに持つ図様は、歌意に基づく情景や留守文様を描く。これは、第一章の第七三首（第三八段 恋といふ）で指摘したように、物語の情景と必ずしも一致するものではなく、実在する情景でもない〔凡例△〕。しかし、歌かるたの図様においては、物語や歌の情景よりも歌意の情景が優先して描かれることがあり、『伊勢物語』の歌の教養（古典知）のある者だけが享受することができるのである。また、歌ことばをイメージソースとするものは、詠み手の想いや状況が喻えられた歌の情景やモチーフを歌の語彙に基づいて描くものである〔凡例▲〕。例えば、第三首（第二段 西の京）「起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ」のように「眺める人」と「長雨」を掛詞した歌では、「長雨」の語彙に基づいて〈雨〉が描かれるといったように、物語とは別の情景である場合も多い。

最後に、詠み手の姿、あるいは歌を宛てた相手の姿を描くものである〔凡例◎〕。歌の詠み手を情景のなかに配置するものの、『百人一首』や「歌仙絵」の趣向で描くもの、歌を宛てた想い人の姿を描くものが挙げられる。また、伊勢絵に描かれるボーリングのままに詠み手のみが描かれる図様や歌の語彙に基づくモチーフを手に携える図様も見受けられ、座像に留まらない多様性も看取することがで

きる。そして、以上に分類できない図様は、その他に分類している「凡例※」。

幾つかの章段にのみ絵を添える伊勢物語絵に対して、和歌のひとつひとつに絵を添える歌絵の要素を持つ「伊勢物語御歌かるた」は、様々なところからイメージソースを引いて図様が形成されていることが判る。次章では、以上を踏まえて『扇の草子』と「伊勢物語御歌かるた」の図様を比較し、伊勢歌絵の図様系譜の検証としたい。

(二)『扇の草子』と「伊勢物語御歌かるた」

先に伊勢歌絵の図様形成において、先行する伊勢物語絵や歌意、歌ことば、歌の詠み手がイメージソースとなることを指摘した。さらに、「伊勢物語御歌かるた」の図様形成において、『扇の草子』が影響を与えていることは、既に安原氏の研究において指摘される⁽³⁵⁾ところである。本節では、作品郡のなかで最も多く『伊勢物語』の和歌を収載している扇の草子根津本を比較作品とする。

まず、扇の草子根津本も先行する伊勢絵の伝統図様がある章段の和歌においては、基本的に伊勢絵に基づいた図様形成を行っていることが明らかである。しかし、扇面に描かれる伊勢絵と伊勢歌絵である『扇の草子』が異なるのは、伊勢絵図様をそのまま扇面に描くのではなく、ひとりの人物を中心とした伊勢絵の一部のみを抜き出したり、伊勢絵から人物を排して留守文様化したりと、画面に合わせて図様が簡略化されていることである。そして、先に比較した「図9」のように、伊勢絵の一部を抜き出して描く『扇の草子』の図様はかるたにも同様に描かれていることが判る。また、対照表の△／▲は、歌意や歌ことばに基づいて形成された図様であることを示すが、これらも『扇の草子』に倣ってかるた図様に転用されていることが判る。

扇の草子根津本の先行研究では、梵字白描絵巻、久保惣絵巻、異本絵巻、小野家本、嵯峨本との図様比較において、収載される『伊勢物語』和歌二十九首のうち第一八、一九首（第一三段、第三三首（第一五段）、第六五首（第三二段）、第七一首（第三七段）、第九二首（第五〇段）、第一五四首（第八四段）、第二〇二首（第一二〇段）の計八首には一致する図様が見受けられないことが指摘されている⁽³⁶⁾。「伊勢物語御歌かるた」諸本と扇の草子根津本の比較によって、かるたの図様形成において、先行する伊勢絵作品に加え『扇の草子』も参照されていたことは明らかであり、延いては、『扇の草子』に収載されない和歌の図様においても、伊勢絵から図様の一部を抜き出す、留守文様化する、歌意や歌ことばにイメージソースをとるという手法自体が受け継がれ、二〇九首あるかるた図様が形成

できた可能性が高い。

一方で、扇の草子根津本にまったく見られなかったのが、歌の詠み手を描く図様である。扇の草子根津本において描かれる人物のほとんどは、伊勢絵に基づく図様を含む物語をイメージソースとする図様の登場人物として、あるいは歌ことばに基づく歌の情景の一部として描かれる人物である。扇の草子根津本一作品のみの比較ではあるが、歌の詠み手が屋外に座す姿や歌ことばに基づくモチーフを持つ立ち姿、背景のない画面に『百人一首』や「歌仙絵」の趣向で描かれる姿は、何れもかたという作品形式に合わせて形成された図様であると推察される。

四. おわりに

以上、「伊勢物語御歌かるた」の諸本紹介と図様系統についての考察をおこなった。なかには実見に至らぬものもあり、今後この図様系統の分類については再検討の余地があるう。「伊勢物語御歌かるた」は制作者や伝来が明らかなのが少なく、また画風から絵師の推定や詳細な制作年代を定めることは非常に困難である。しかし、いざすべての札を並べて見てみると図様の系統分類が把握できるほどに作品ごとには特徴的な要素があり、数首を見るだけで系統の判断に検討をつけることが可能であった。本研究によって、今まで漠然としていた「伊勢物語御歌かるた」研究における一定の筋道を示すべく分類がかなったといえる。

「伊勢物語御歌かるた」をはじめ、十八世紀の江戸文化における能楽や歌舞伎舞踊、浮世絵などにも見られるように、伊勢物語世界への関心の高さは大名階層から庶民階層まで広く浸透するものである。絹本着色の豪華版かるたから木版手彩色のかるたまで、実に多様な『伊勢物語』の和歌の図像化があったのであり、今日、「伊勢物語御歌かるた」の現存作品の大部分は木版手彩色のかるたが占めている【図17】⁽³⁷⁾。さらに、その背後には江戸における古典文芸の流布や浸透に直接的に関与できた「イメージの力」があることにも着目したい。

本稿は、「伊勢物語御歌かるた」諸本における共立本の位置づけを目的とするものであるが、これを通じて十八世紀の伊勢絵そのものの展開の一部が視野に入ってきた。平安時代に貴族社会のなかで誕生した白描・彩色絵巻にはじまり、政治的な場で受容された屏風

などの大画面形式が登場する一方、『伊勢物語』享受層の広がりにより色紙をはじめとする小画面形式へと伊勢絵は多様に展開する。『伊勢物語御歌かるた』においては、A系統の図様を持つ中世伊勢絵に近い位置にある初期かるた作品において創成期を迎え、次第にかるたとしての図様を整え定型化するB系統において『伊勢物語』の絵画化への関心は最盛期を迎えるが、やがて量産されるC系統ではその意欲は衰退しパターンとして消費されていく。D系統の図様は管見の限りで量産型のかかるたに継承されていないが、そもそもD系統がB系統のかかるたに多様性を加えることを目的としたことを視野に入れ、その要因のひとつと推察しよう。

伊勢絵図様の簡略化という視点において、『扇の草子』と『伊勢物語御歌かるた』との関係は見逃すことができない。『扇の草子』は十六世紀から十七世紀のごく限られた期間にのみ現存作例を残しているが、『扇の草子』の一部として求められた和歌を通じた『伊勢物語』享受が『伊勢物語御歌かるた』へ移行している可能性も指摘できよう。さらなる『伊勢物語御歌かるた』研究を深めていきたい。

注

- (1) 片桐洋一『伊勢物語の研究「研究編」』明治書院、一九六八年／同『伊勢物語の研究「資料編」』明治書院、一九六九年／同『伊勢物語の新研究』明治書院、一九八七年
- (2) 藤島綾「二枚の絵札——伊勢物語かるたをめぐって——」『国文学研究資料館紀要』四十二号、国文学研究資料館、二〇一六年三月
- (3) 前掲注(2) (藤島氏、二〇一六)
- (4) 共立本に失われている上の句札は、第一、一一、一七、一九、二四、三五、五三、六二、六五、七一、八一、九一、九七、九八、一一六、一三三、一三九、一五五、一六〇、一八二、一八八、一九一、一九五、二〇三首の計二四首。下の句札は全二〇九枚中、一八八枚が現存、失われているのは、第五、九、一六、二六、二九、三五、四五、五八、六〇、九七、一〇四、一二〇、一二一、一四六、一五六、一六一、一六七、一七五、一七八、一八四、一八六首の計二一首。
- (5) 共立本と共通祖本を持つと考えられる永青文庫本との図様比較を行う。すると共立本の第一六二首に描かれる業平一行に差し出される海藻のモチーフは、本来は第一六一首に描かれるべき図様であったことが判る。また、第一六三首の杖を突く男性像も、永青文庫本との比較によると第一六二首で描かれるべき図様であることが判る。よって、第一六二首、第一六三首の二首は、絵と和歌にずれが生じていることが明らかで

ある。

- (6) 前掲注(2) (藤島氏、二〇一六)
- (7) 『第十六回永青文庫展 国文学と美術』熊本県立美術館、一九八八年／『永青文庫所蔵 細川家にみる大名文化展』さこう美術館、一九九四年／『第十八回永青文庫展 豊麗なる彩の世界——細川家伝来の絵画の名品——』熊本県立美術館、二〇〇四年／『永青文庫 季刊誌 源氏千年と物語 絵』六十五号、二〇〇九年
- (8) 前掲注(2) (藤島氏、二〇一六)
- (9) 山口吉郎兵衛『うんすんかるた』リーチ、一九六二年
- (10) 『宮武外骨著作集』四卷、河出書房新社、一九八五年
- (11) 『中村幸彦著述集』十三卷、中央公論社、一九八九年
- (12) 江橋崇『歌留多になった小倉百人一首』『百人一首万華鏡』思文閣出版、二〇〇五年
- (13) 同志社大学図書館 貴重書デジタル・アーカイブ http://library.doshisha.ac.jp/ir/digital/archive/ise_karuta/imgidx.html (二〇一七年六月九日閲覧)
- (14) 特別展「伊勢物語雅と恋のかたち」和泉市久保惣美術館展覧会図録、二〇〇七年一〇月〔作品番号：八二〕
- (15) 前掲注(14) (和泉市久保惣美術館、二〇〇七)〔作品番号：七九〕／京都細見美術館『琳派・若冲と雅の世界』二〇一〇年一〇月〔作品番号：六一〕／京都細見美術館『伊藤若冲と京の美術 細見コレクションの精華』二〇一四年三月〔作品番号：三〇〕
- (16) 極書二通のうち「枳極」には、「伊勢物語歌骨牌極彩色絵歌裏金地／堅参寸横式寸／右／葛岡宣慶正筆無疑者也／天保十五辰／林鐘下旬 古昔菴好斎」と記され、「副簡極」(銀砂子藤色紙)には、「宣慶極彩色絵歌／歌骨牌伊勢物語之／図画正筆相違無御座候／以上／二月柳宮 古筆目利隠居／了意(花押)「琴山」(墨文方印)」と記されている。
- (17) 前掲注(14) (和泉市久保惣美術館、二〇〇七)〔作品番号：八一〕
- (18) 『鉄心斎文庫所蔵 伊勢物語図録【第四集】伊勢物語かるた・王朝へのがれ』鉄心斎文庫伊勢物語文華館、一九九三年〔作品番号：三〕／国文学研究資料館 電子資料館 日本古典籍総合目録データベース、館蔵和古書目録データベース <http://basel.nijl.ac.jp/~wakosyo/> (二〇一七年十月三十日閲覧)
- (19) 特別展「伊勢物語と荳屋」荳屋市美術博物館展覧会図録、二〇〇〇年一〇月〔作品番号：一五一〕／前掲注(14) (和泉市久保惣美術館、二〇〇七)〔作品番号：八〇〕
- (20) 前掲注(18) (鉄心斎文庫伊勢物語文華館、一九九三)〔作品番号：二二〕／前掲注(18) (荳屋市美術博物館、二〇〇〇)〔作品番号：一五二〕

- (21) 前掲注(19) (芦屋市美術博物館、二〇〇〇) (作品番号：一四八)
 前掲注(18) (鉄心斎文庫伊勢物語文華館、一九九三) (作品番号：一)
 (22) 前掲注(19) (芦屋市美術博物館、二〇〇〇) (作品番号：一四七)
 (23) 鈴鹿文庫一覽〔四五―伊勢物語歌留多〕 <http://www.libelime-u.ac.jp/SUZUKA/ichiran.html> (二〇一七年九月三十日閲覧)
 (24) 東京国立博物館 画像検索 <http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/index> (二〇一七年十二月九日閲覧)
 管見の限りでは、上の句札の第一、四六、四七、九八首、下の句札の第一、二、三、四首、加えて上の句札下の句札ともに第二〇一首以降が失われている。

- (25) 特別展「伊勢物語の世界」図録、五島美術館、一九九四年十月
 (26) 羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成』研究篇、角川学芸出版、二〇〇七年
 (27) 「根津美術館蔵『扇面歌意画卷』について」『扇面歌意画卷』根津美術館、二〇一五年
 (28) 前掲注(14) (和泉市久保惣美術館、二〇〇七)
 (29) 前掲注(14) (和泉市久保惣美術館、二〇〇七)
 (30) 伊藤敏子『伊勢物語絵』角川書店、一九八四年
 (31) 千野香織『絵巻 伊勢物語絵』(日本の美術) 四〇二 至文堂、一九九一年／同「伊勢物語文化の展開」前掲注(13) (芦屋市美術博物館、二〇〇〇)
 (32) 逸翁美術館、大和文華館、常盤山文庫、細見美術館、東京藝術大学大学美術館、大東急記念文庫、遠山記念館、個人蔵に分蔵
 (33) 村瀬実恵子「琳派と伊勢絵」「琳派と伊勢絵」鑑賞シリーズⅡ、根津美術館、一九九九年
 主人公の光源氏の行動範囲が僅かに須磨、明石、京都に限られる極めて閉鎖的である『源氏物語』と比較して、『伊勢物語』はわが国最初の旅行記であった可能性が指摘され、『伊勢物語』と名所の関わりが深いことが窺い知れる。
 (34) 安原眞琴『『扇の草子』の研究』ペリかん社、二〇〇三年
 著書において安原氏は、粉本と考えられるものが「貝絵」や「扇絵」ではなかったか。」とも指摘している。
 (35) 前掲注(34) (安原氏、二〇〇三)
 (36) 前掲注(27) (根津美術館、二〇一五)
 一方で、中尾家所蔵の「伊勢物語絵本」、甲子園学院美術資料館所蔵の「伊勢物語絵巻」には、第六五首(第三二段)、第一五四首(第八四段)を除く六首の図様が見いだせるとも指摘されている。

(37) 木版かるたの例として挙げた「図17」は、「図13・14・15・16」と同じ和歌、第一五七首（第八七段 布ひきの滝）「蘆の屋のなだの塩焼いとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり」の札である。旧鉄心斎蔵の木版かるたは下の句札に絵が描かれるため、「黄楊」の語彙に基づいた図様形成によって「図17」の情景が描きだされたのである。

〔附記〕

調査及び画像提供をはじめ、ご協力いただきました永青文庫、共立女子大学博物館の皆様に深く感謝申し上げます。



図2 共立本
塗箱（蓋上部 部分）



図1 共立女子大学博物館蔵 伊勢物語御歌かるた



図5 （右）共立本、（左）永青文庫本

第161首
（第87段 布引の滝）

第162首
（第88段 月をもめでじ）

第163首
（第89段 なき名）



図3 共立本 第73首
（第38段 恋といふ）



図4 共立本 第103首
（第57段 恋ひわびぬ）



図8 旧鉄心齋a本 第7首
(第6段 芥川)



図7 同志社本 第7首
(第6段 芥川)



図6 永青文庫本 第7首
(第6段 芥川)



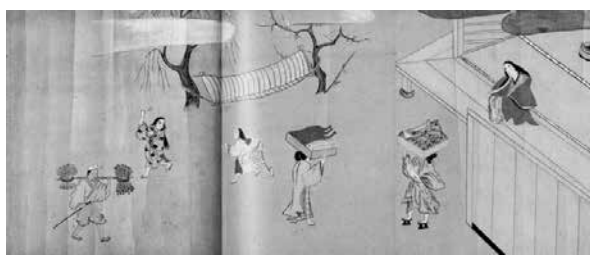
〈比較〉 扇の草子根津本



〈比較〉 共立本



図9 同志社本 第78首
(第41段 紫)



〈比較〉 小野家本



図 11 細見本 第 209 首
(第 125 段 つひにゆく道)



〈比較〉共立本



図 10 個人蔵乙本 第 12 首
(第 9 段 富士の山)



〈比較〉嵯峨本



〈比較〉同志社本



〈比較〉永青文庫本



図 12 旧鉄心斎 b 本 第 10 首
(第 9 段 東下り)



〈比較〉小野家本



図 14 旧鉄心斎 c 本 第 158 首
(第 87 段 布ひきの滝)



図 13 旧鉄心斎 c 本 第 157 首
(第 87 段 布ひきの滝)



図 16 小野家本
(第 87 段 布ひきの滝)



図 15 旧鉄心斎 d 本 第 158 首
(第 87 段 布ひきの滝)



図 17 木版旧鉄心斎本 第 157 首
第 87 段 布ひきの滝

〔図版出典〕

図版は、以下より画像提供、及び複写・転載させていただきました。

図1、2、3、4、5、9 〈比較〉、10 〈比較〉 共立女子大学博物館

図5、6、12 〈比較〉 永青文庫

図7、9、12 〈比較〉 同志社大学図書館 貴重書デジタル・アーカイブ

図8 国文学研究資料館 電子資料館

図9 〈比較〉 『扇面歌意画巻』 根津美術館、二〇一五年

図9 〈比較〉、12 〈比較〉、16 羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成』研究篇、角川学芸出版、二〇〇七年

図10 特別展「伊勢物語の世界」図録、五島美術館、一九九四年十月

図11 京都細見美術館『琳派・若冲と雅の世界』二〇一〇年一〇月

図12 〈比較〉 国立国会図書館デジタルコレクション

図13、14、15、17 特別展「伊勢物語と芦屋」芦屋市美術館博物館展覧会図録

「伊勢物語御歌かるた」図様形成のイメージソース

「伊勢物語御歌かるた」と先行する伊勢絵作品との比較を行い、図様形成におけるイメージソースを一覧に記した。以下は、参照した作品、文献の一覧である。

【伊勢絵先行作例一覧】

- 梵…梵字経刷白描伊勢物語絵巻
- 久…和泉市久保惣記念美術館本伊勢物語絵巻
- 異…異本伊勢物語絵巻
- 大…大英図書館本伊勢物語図会
- 小…小野家本伊勢物語絵巻
- 甲…甲子園学院美術資料館本伊勢物語絵巻
- 嵯…嵯峨本

- 扇面歌意画卷 紙本着色墨書 根津美術館（うち『伊勢物語』和歌二十九首）

【伊勢物語御歌かるた諸本一覧】

- 伊勢物語御歌かるた 絹本着色墨書 共立女子大学博物館
- 伊勢物語御歌かるた 絹本着色墨書 永青文庫
- 伊勢物語御歌かるた 絹本着色墨書 同志社大学図書館
- 伊勢物語かるた 紙本着色墨書 国文学研究資料館（旧鉄心斎a本）
- 伊勢物語歌留多 紙本着色墨書 愛媛大学図書館鈴鹿文庫
- 伊勢物語かるた 紙本着色墨書 東京国立博物館
- その他—
- 個甲…伊勢物語かるた 伝千種有能（書） 紙本着色墨書 個人蔵（個人蔵甲本）
- 細…伊勢物語かるた 伝葛岡宣慶（書） 紙本着色墨書 細見美術館
- 久…伊勢物語かるた 絹本着色・紙本墨書 和泉市久保惣記念美術館
- 鉄b…伊勢物語歌留多 紙本着色墨書 国文学研究資料館（旧鉄心斎b本）

鉄c…伊勢ものかたりカルタ 紙本着色墨書 国文学研究資料館（旧鉄心斎c本）

鉄d…伊勢物語御歌かるた 紙本金地着色墨書 国文学研究資料館（旧鉄心斎d本）

芦…伊勢物語歌かるた 絹本着色墨書 芦屋市立美術館博物館
個乙…伊勢物語歌かるた 紙本着色墨書 個人蔵（個人蔵乙本）

【参考文献】

『伊勢物語図録【第四集】』鉄心斎文庫伊勢物語文華館、一九九三年

特別展「伊勢物語の世界」図録、五島美術館、一九九四年

特別展「伊勢物語と芦屋」芦屋市美術館博物館展覧会図録、二〇〇〇年

羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成』角川学芸出版、二〇〇七年

特別展「伊勢物語 雅と恋のかたち」和泉市久保惣美術館展覧会図録、二〇〇七年

京都細見美術館『伊藤若冲と京の美術 細見コレクションの精華』二〇一四年

『扇面歌意画巻』根津美術館、二〇一五年

「伊勢物語御歌かるた」研究

国文学研究資料館 電子資料館

鈴鹿文庫一覧データベース

東京国立博物館 画像検索

同志社大学図書館 貴重書デジタル・アーカイブ

【凡例】

○ 先行する伊勢絵

● 先行する伊勢絵（留守文様）

△ 歌意

▲ 歌の語彙

□ 物語

■ 物語（留守文様）

◎ 歌の詠み手／相手

※ その他

10		9 東下り				8	7	6	5	4	3	2	1 初冠		章段
たのむの雁		隅田川	富士の山	宇津の山	八橋	浅間の嶽	かへる波	芥川	関守	西の対	ひじき藻	西の京の女	陸奥のしのぶもちずり	春日の里	場面
		異(1-7)、大、小、甲、嵯	久(絵4)、異(1-5)、大、小、甲、嵯	梵(断6)、異(1-6)、大、小、嵯	梵(断5)、異(1-4)、大、小、甲、嵯	異(2-14)、大、小、甲、嵯	大、小、嵯	異(3-23)、大、小、甲、嵯	久(絵6)、異(1-9)、大、小、甲、嵯	梵(断4)、久(絵2)、異(1-8)、大、小、嵯	梵(断3)、大、小、嵯	中、甲、嵯	大	梵(断1)、久(絵5)、異(3-18)、大、小、中、甲、嵯	伊勢絵先行作品
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	歌
—	—	○	●	●	●	—	▲	—	—	●	▲	—	—	—	扇の草子根津
▲(飛)	▲	○	●	—	●	●	▲	□	○	○(2人)	▲	▲◎	※	—	共立
▲(飛)	▲	○	●	○	●	●	▲	□	○	○(2人)	▲	▲◎	※	○	永青文庫
▲	▲	●	●	●	●	●	▲	○	●	○(2人)	▲	●	※	○	同志社
▲	▲(飛)	○	●	○	●	○	▲	◎	◎	○	▲	○	◎	○	旧鉄心齋 ^a
▲	▲(飛)	○	●	○	●	○	▲	◎	◎	○	▲	○	◎	○	鈴鹿文庫
▲(飛)	▲	○	●	○	●	●	▲	○	○	○	▲	◎	※	—	東博
		○個乙	●個乙	●久・個乙、○鉄 ^b				○個甲・久、□個乙	※細、●久				※久	○細・個甲・久・鉄 ^a	その他

18	17		16				15	14			13		12	11	章段
白菊	年ごろおとづれざりける人		天の羽衣		紀有常		しのぶ山	くたかけ			武蔵燈		武蔵野	ほどは雲居に	場面
大、小、 甲、嵯			甲				甲		久(絵7)、 異(2-11)、大、 小、甲、嵯		甲	異(2-12)、大、 小、甲、嵯	異(2-17)	伊勢絵 先行 作品	
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	
—	—	—	—	—	—	—	※	—	○	—	○	●	○	—	扇の草子 根津
●	▲	▲◎	○	○	■	—	▲	▲	●	▲	—	●	—	▲	共立
●	▲	▲	○	○	■	□	▲	▲	●	▲	●	●	○	▲	永青文庫
○	▲	▲	▲	▲	■	◎	▲	▲	◎	▲	●	●	○	▲	同志社
●	▲	◎	◎	◎	■	□	▲	▲	●	▲	●	▲	○	△	旧 鉄心齋 ^a
●	▲	◎	◎	◎	■	□	▲	▲	●	▲	●	▲	○	△	鈴鹿文庫
●	▲	◎	○	○	■	□	▲	▲	●▲	▲	●	▲	○	▲	東博
									●細	※細	◎個 甲、●個 乙	○久、● 個乙			その他

22			21							20		19		18	章段
千夜を一夜に			忘るる草の種をだに				出でていなむと思ひて			春の紅葉		天雲のよそ		白菊	場面
大、小									甲	大、小、 甲、嵯			甲		
45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	伊勢絵 先行 作品
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	歌
▲	▲	◎	▲	◎	▲	▲	▲	◎	○	—	□	▲	○	□	扇の草子 根津
▲	▲	◎	▲	◎	▲◎	▲	▲	◎	○	○	□	▲	○	□	共立
●	▲	◎	◎	◎	▲	▲	◎	◎	○	※	■	▲	◎	■	永青文庫
▲	▲	◎	◎	◎	▲◎	▲	▲	◎	◎	○	■	○ (32)	▲ (33)	□	同志社
▲	▲	◎	◎	◎	▲◎	▲	▲	◎	◎	○	■	▲	○	□	旧 鉄心齋a
▲	▲	◎	◎	◎	▲◎	▲	▲◎	◎	○	○	□	▲	○	□	鈴鹿文庫
▲	▲	◎	◎	◎	▲◎	▲		◎	○	○	□	▲	○	□	東博
●個甲										○細	□細				その他

27		26	25		24				23				22	章段	
盟のかげ		もろこし船	あはで寝る夜ぞ		およびの血して書く	梓弓		新枕	高安の女		立田越え	筒井筒		千夜を一夜に	場面
甲	梵(断10)、大、小、嵯				異(2-10)、大、小、甲	大、小、嵯		大、小	梵(断8)	異(2-16)、小、嵯	大、小、嵯	梵(断7)、異(2-15)、小、甲、嵯	嵯	伊勢絵先行作品	
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	歌
—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○?	—	○	—	扇の草子根津
●	○	◎	▲	▲	○	◎	—	○	○	▲	▲	◎	○	▲◎	共立
○	○	◎	▲	▲◎	○	◎	○	○	○	▲◎	▲	◎	○	▲◎	永青文庫
▲	●	▲	◎	▲	○	▲◎	▲	○	◎	▲	▲	◎	●	●	同志社
○	※	◎	▲	◎	○	◎	◎	○	◎	▲◎	▲◎	◎	○	○	旧鉄心齋a
○	※	◎	▲	◎	○	◎	◎	○	◎	▲◎	▲◎	◎	○	○	鈴鹿文庫
○	○	◎	▲	◎	○	◎	○	○	◎	▲◎	□	◎	—	—	東博
○細、▲久	○細・個甲					◎個乙						□個甲 ○個乙			その他

39	38		37		36	35	34	33		32	31	30	29	28	章段	
女車の蛸	恋といふ		二人して結びし紐		峯まではへる	あわ緒によりて	いへばえに	満ちくる潮		しつのをだまき	よしや草葉	はつかなりける女	花の賀	あふごかたみ	場面	
甲			甲										大、小、 蛸			伊勢絵 先行 作品
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61		歌
—	—	—	—	▲	—	—	—	—	—	▲	—	—	—	—	扇の草子 根津	
●	△	△	▲◎	—	▲	▲	◎	▲	▲	—	▲	▲	—	◎	共立	
●◎	△	△	▲◎	▲	▲	▲	◎	▲	▲	▲	▲◎	▲	○	◎	永青文庫	
●	◎	◎	◎	▲	▲	※	◎	▲	▲	▲	△	▲	▲	▲	同志社	
◎	△	△	◎	▲	▲	▲	◎	▲	▲	▲	▲◎	▲	◎	◎	旧 鉄心齋a	
◎	△	△	◎	▲	▲	▲	◎	▲	▲	▲	▲◎	▲	◎	◎	鈴鹿文庫	
●◎	△	△	▲◎	▲	▲	▲	※	▲	▲	▲	▲◎	※	○	◎	東博	
															その他	

49	48	47		46	45		44	43			42	41	40	39	章段	
若草の妹	人待たむ里	大幣		うるはしき友	ゆく蛸		馬のはなむけ	名のみ立つ			誰が通ひ路	紫のゆかり	すける物思ひ	女車の蛸	場面	
大、小、蛸						梵(11)、大、小、蛸	甲	甲				久(絵3?)、大、小、蛸	甲			伊勢絵先行作品
90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76		歌
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	扇の草子根津	
◎	▲	▲	▲	◎	▲	■	▲◎	●	○	●◎	◎	○	□	□	共立	
◎	▲	▲	▲	◎	▲	■	▲◎	●	○	●◎	◎	○	□	□	永青文庫	
▲	□	▲	△	◎	△◎	■	▲	※	▲	■	▲	●	◎	※	同志社	
◎	▲	▲	▲	◎	▲	■	◎	●	○	●◎	◎	▲	□	■	旧鉄心齋 ^a	
◎	▲	▲	▲	◎	▲	■	◎	●	○	●◎	◎	▲	□	■	鈴鹿文庫	
△	▲	▲	▲	◎	▲	■(蝶)	□?	●	○	●◎	◎	▲	□	■	東博	
					△細	□細									その他	

58	57	56	55	54	53	52	51	50						49	章段
荒れたる宿	恋ひわびぬ	草の庵	言の葉	つれなかりける女	あひがたき女	飾り粽	菊	行く水に数かく		鳥の子				若草の妹	場面
					大、小	甲	大、小、 嵯	大、小、 嵯		甲					伊勢絵 先行 作品
105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	歌
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	●	—	扇の草子 根津
▲	▲	△	□	◎	▲	▲	—	—	▲	○	▲	▲	○	—	共立
▲	▲	△	□	◎	▲	▲	○	●	▲	○	▲	▲	○	◎	永青文庫
▲	▲	▲	▲◎	▲	▲	●	●	●	▲	●	◎	▲	●	▲	同志社
▲	▲	△	◎	◎	▲	●	●	●	▲	●	▲	▲◎	○	◎	旧 鉄心斎 ^a
▲	▲	△	◎	◎	▲	●	●	●	▲	●	▲	◎	○	◎	鈴鹿文庫
▲	▲	△	◎	◎	▲	●	—	○	▲	○	▲	▲	○	◎	東博
										○細			○細		その他

65			64		63		62		61		60	59		58	章段	
恋せじの禊		在原なりける男	玉簾		つくも髪		こけるから		染河		花橘	東山			場面	
	梵(断16-17)、異(3-22)、大、小、甲。嵯	梵(断15)			大、小、嵯		甲				甲、嵯			梵(断13)、甲		伊勢絵先行作品
120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106		歌
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	扇の草子根津	
■	●	◎	▲◎	—	□	○	▲◎	▲	▲	▲	●	▲◎	▲	●	共立	
■	●	◎	▲	▲	□	○	▲◎	▲	▲	▲	●	▲	▲	●	永青文庫	
□	●	■	▲	▲	※	○	▲◎	▲	▲	□	●	□	▲	●	同志社	
□	●	◎	◎	※	□	○	▲◎	▲	▲	▲	○	▲	▲	○	旧鉄心斎 ^a	
□	●	◎	◎	※	□	○	▲◎	▲	▲	▲	○	▲	▲	○	鈴鹿文庫	
□	●	◎	◎	▲	◎	○	▲◎	▲	▲	▲	○	□	△◎	○	東博	
									▲◎細	▲細	●久				その他	

75	74	73	72	71		70	69			68	67	66	65		章段
海松	重なる山	月のうちの桂	大淀の松	神のいがき		あまの釣舟	君や来し			住吉の浜	生駒山	難波津	笛を吹く男		場面
				甲	蛭		異(1-2)		梵(断19)、異(1-1)、大、小、蛭	蛭	蛭	異(2-13)、大、小		梵(断18)、大、小	伊勢絵先行作品
135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	歌
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	扇の草子根津
▲	▲	—	▲	●	●	▲	▲	◎	◎	○	▲	▲	□	●	共立
▲	▲	▲	▲	●	○	▲	▲	■◎	○	○	▲	▲	□	●	永青文庫
▲	▲	▲	▲	※	●	▲	■	◎	○	▲	■	▲	◎	●	同志社
▲	▲	▲	▲	●	○	▲	▲	◎	◎	○	※	▲◎	△	●	旧鉄心斎a
▲	▲	▲	▲	●	○	▲	▲	◎	◎	○	▲	▲◎	△	●	鈴鹿文庫
▲	▲	▲	▲	●	○	▲	▲	◎	○	○	○?	△	◎	○	東博
								■◎細	○細	○細					その他

82						81	80	79	78	77	76	75			章段
まだきも月のかく		天の川		渚の院の桜		塩竈	おとろへたる家	千ひろあるかげ	山科の宮	春の別れ	小塩の山				場面
				大、小	異(3-20)、大、小、甲、蛭	異(3-19)、甲、蛭	大、小、蛭	甲	甲、蛭	異(1-3)、大、小、甲	大、小、甲				
150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	伊勢絵先行作品
—	—	—	▲	—	—	▲	—	—	—	—	—	—	—	—	歌
▲	▲	※	▲	●	●	▲	●◎	○	○	●	—	◎	▲	◎	扇の草子根津
▲	□	▲◎	▲	●	●	▲	●◎	○	○	●	●	◎	▲	◎	共立
▲	□	▲◎	◎	●	●◎	▲	●	▲	●	●	●	◎	▲	▲	永青文庫
▲	◎	▲	▲	●	●	▲	◎	▲	◎	●	●	◎	▲	▲	同志社
▲	◎	▲	▲	●	●	▲	◎	▲	◎	●	●	◎	▲	▲	旧鉄心斎a
▲	□	◎	▲	●	○	▲	●◎	○	○	●	●	◎	▲	◎	鈴鹿文庫
				○個甲				○個甲							東博
															その他

91	90	89	88	87					86	85	84		83		章段
惜しめども	桜花	なき名	月をもめでじ	高杯に盛る海松	海士の漁火	布ひきの滝	芦屋の里	おのがさまさま	目離れせぬ雪		さらぬ別れ		小野の雪		場面
				甲	蛭	大、小、甲、蛭							異(3-21) 大、小、 甲、蛭		伊勢絵 先行 作品
165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	歌
—	—	—	—	—	▲	—	●	—	—	—	※	—	—	—	扇の草子 根津
▲	▲	▲ (162)	■ (161)	?	—	●	●	▲	◎	—	□	□	○	▲	共立
▲	▲	▲	▲	●	●	●	●	▲	◎	◎	□	□	○	▲	永青文庫
▲	▲	▲	▲(月)	●	●	●	●	▲	※	■	□	■	▲	■	同志社
▲	▲	▲	▲	▲	●	●	●	▲	◎	◎	□	◎	○	▲	旧 鉄心齋a
▲	▲	※	▲	▲	●	●	●	▲	◎	◎	□	◎	○	▲	鈴鹿文庫
▲	▲	▲	▲	▲	●	●	●	▲	◎	◎	□	□	○	▲	東博
				○鉄b・鉄c・ 鉄d、 ●鉄b・鉄c・ 鉄d、 ▲鉄b・鉄c・ 鉄d、 ●鉄b・鉄c・ 鉄d、 ○鉄b・鉄c・ 鉄d、<											

104	103	102	101	100	99		98	97	96	95	94		93	92	章段
賀茂の祭	寝ぬる夜	世のうきこと	藤のかげ	忘れ草	ひをりの日		梅の造り枝	四十の賀	天の逆手	彦星	紅葉も花も		たかきいやしき	棚なし小舟	場面
甲			大、小、甲、蛭	梵(断21)、大、小		甲	甲、蛭			梵(断20)、蛭	大、甲、小		蛭		伊勢絵先行作品
180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	歌
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	扇の草子根津
■	▲	□	▲◎	▲◎	◎	□	○	▲	▲	▲	▲	▲	※	▲	共立
■	▲	□	▲◎	▲	◎	□	○	▲	▲	▲	▲	▲	※	▲	永青文庫
■	▲	▲	●	▲	◎	■	●	▲	▲	▲	○	▲	▲	▲	同志社
■	▲	▲	▲	▲◎	◎	■	○	◎	▲	▲	▲	▲	◎	▲	旧鉄心齋 ^a
■	▲	▲	▲	▲◎	◎	■	○	◎	▲	▲	▲	▲	◎	▲	鈴鹿文庫
■	▲	□	●◎	◎	◎	□	○	▲◎	▲	▲	▲	▲	◎	▲	東博
															その他

114	113	112	111			110	109	108		107			106	105	章段
芹河行幸	短き心	須磨のあま	まだ見ぬ人			魂結び	人こそあだに	浪こそ岩		身を知る雨			竜田川	白露	場面
甲													蛭		伊勢絵 先行 作品
195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	歌
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	扇の草子 根津
—	◎	▲	◎	—	◎	▲	—	▲	▲	◎	◎	◎	—	▲	共立
○	◎	▲	◎	◎	◎	▲	▲	▲	▲	◎	◎	◎	●	▲	永青文庫
○	◎	※	◎	◎	◎	□	▲	▲	▲	▲◎	□	◎	●	▲	同志社
○	◎	▲	▲	◎	◎	▲	▲◎	▲	▲	◎	◎	◎	●	□	旧 鉄心齋 ^a
○	◎	▲	▲	◎	◎	▲	▲◎	▲	▲	◎	◎	◎	●	□	鈴鹿文庫
○	◎	▲	▲	▲◎	◎	▲	□	▲	▲	◎	◎	◎	●	□	東博
															その他

125	124	123		122	121		120	119	118	117		116	115	章段
つひにゆく道	われとひとしき人	鶉		井出の玉水	梅壺		筑摩の祭	形見	たえぬ心	住吉行幸		はまびさし	みやこしま	場面
甲、蛭					大		甲	大、小、蛭		甲				伊勢絵 先行 作品
209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	歌
—	—	—	—	—	—	—	▲	○	—	—	—	—	—	扇の草子 根津
◎	◎	▲	◎	▲	—	▲◎	□	○	▲	▲	▲	▲	□	共立
○	◎	▲	◎	▲	▲◎	▲	□	○	▲	▲	▲	▲	□	永青文庫
○	※	▲	▲	▲◎	▲	※	□	●	※	●	▲	▲	■	同志社
○	◎	▲	◎	▲	▲◎	▲◎	□	○	▲	▲	▲	▲	□	旧 鉄心齋 ^a
○	◎	▲	◎	▲	▲◎	▲◎	□	○	▲	▲	▲	▲	◎	鈴鹿文庫
—	—	—	—	—	—	—	—	—	▲	▲	▲	▲	□	東博
○細		▲細		▲細										その他